OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	促音挿入による強調について
Author(s)	金子, 理紗
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 7-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

促音挿入による強調について

金子 理紗

要旨　日本語では、「すっごい」のように促音を挿入して強調を示すことがある。本研究では、促音の挿入がどのような子音の前で強調として認められるか、東京方言話者20名を対象に、音声を用いた調査と文字を用いた調査をそれぞれ行なった。その結果、音声の場合でも文字の場合でも、一般的には避けられる有声子音前への挿入も含めて、促音の挿入は強調表現として認められやすいことが判明した。また、容認度の評定には、子音種以外の要因も関わっている可能性が示唆された。

1 はじめに

日本語では、促音を挿入して強調を表すことがある。その際には、一般的には避けられる有声子音の重子音化（Itô and Mester 1995；Kubozono et al. 2009）も起こることがあり、たとえば「すっごい」や「うっるさい」といった表現が挙げられる。先行研究では、そのような強調表現の存在は、少ない例とともに指摘されてはいたが、強調表現として実際にどのくらい認められているかについては、あまり調査されてこなかった。また音声を用いた調査も限られていたことから、以前筆者は発話サンプルを使った調査を行ない、その結果を中間報告した（金子 2015）。本稿の目的は、その後新たに得たデータを加え、促音挿入による強調がどのような語でどの程度容認されうるのか、傾向を明らかにすることである。

2 音声を用いた調査

2.1 調査用の刺激

調査には、3モーラから5モーラの日本語形容詞38語を用いた。日常的に使われている語から、第2音節頭子音の種類（/t, k, s, h, b, d, g, z, m, n, r, j, w, ϕ/）ごとに3語ずつ、ただし/h/と/ɸ（子音無し）/については適当な語が足りなかったため、それぞれ1語のみ用意した(1)。

(1) /t/：きつい、きたない、おとなしい　　/k/：たかい、あかるい、たくましい
　　/s/：おそい、やさしい、おそろしい　　/h/：あほらしい
　　/b/：やばい、あぶない、すばらしい　　/d/：ひどい、めでたい、くだらない[1]
　　/g/：すごい、ながい、はげしい　　/z/：うざい、まずい、めずらしい

[1] 連語だが形容詞的に使われるため調査語に入れた。

/m/：あまい、さみしい、おもしろい　　/n/：かなしい、たのしい、たのもしい

/r/：からい、うるさい、ありがたい　　/j/：かゆい、つよい、くやしい

/w/：よわい、かわいい、やわらかい　　/φ（子音無し）/：あおい

各語のC2前に促音を加えて発話したものを、調査用の音声として作成した。発話は東京方言話者である筆者が自ら行なった。子音部音長の変化以外で強調が知覚されるのを避けるため、なるべく同じ強さ、同じピッチレベル、同じ発話速度で発話した。r音・j音・w音前への促音挿入は、声門閉鎖音が加えられる場合と、各子音が長子音化する場合が想定されることから、それぞれ2パターンの音声を用意した。例えば「からい」であれば、[kaʔrai]と[kar:ai]の2種を作成した。

2.2 調査方法

23歳から30歳の東京方言話者20名（女性18名、男性2名）を対象に、質問紙調査を行なった。質問紙はGoogleフォームを用いて作成し、音声のみのYouTube動画として貼り付けたサンプルの音声を聞いてもらった。各音声の再生回数は制限しなかった。また、音声と文字で印象が異なる可能性を考慮し、各音声には元となった語（例えば「すごい（凄い）」）のみ文字で示し、音声に対応する文字表記（例えば[sug:oi]に対して「すっごい」など）はつけずに聴覚印象のみで判断してもらった。各音声を聞き、強調と感じるかどうかを4段階（強調していると感じる・どちらかというと強調していると感じる・どちらかというと強調しているとは感じない・強調しているとは感じない）で評定してもらった。今回「強調」の定義はせず、回答者に判断を任せた。なお、後述の文字を用いた調査については、調査を実施することも内容についても知らせなかった。

2.3 結果および考察

結果は図1に示したとおりである。図中の「ʔC」は声門閉鎖音を挿入したパターンを、「CC[2]」は子音を長子音化したパターンを表している。強調と感じるか否かを比較するため、4段階評定を「強調と感じる」（4＝強調していると感じる・3＝どちらかというと強調していると感じる）と「強調と感じない」（2＝どちらかというと強調しているとは感じない・1＝強調しているとは感じない）の2つに分けて結果を見る。

まず全体として、いずれの語も「強調と感じる」の評価が過半数に達していることが分かる。次に、無標である無声子音前への促音挿入へ目を向けると、やはり容認度は極めて高く、最も低いものでも「おとなしい」の85%であり、「きつい」「きたない」「あかるい」「たくましい」「おそい」「あほらしい」の6語は100%「強調」と評価されている。一方、通常有標である有声子音前への促音挿入については、前者と比較すると容認度が下がる傾

2 「C:」とすると「:」の記号が見えづらくなるため「CC」としている。

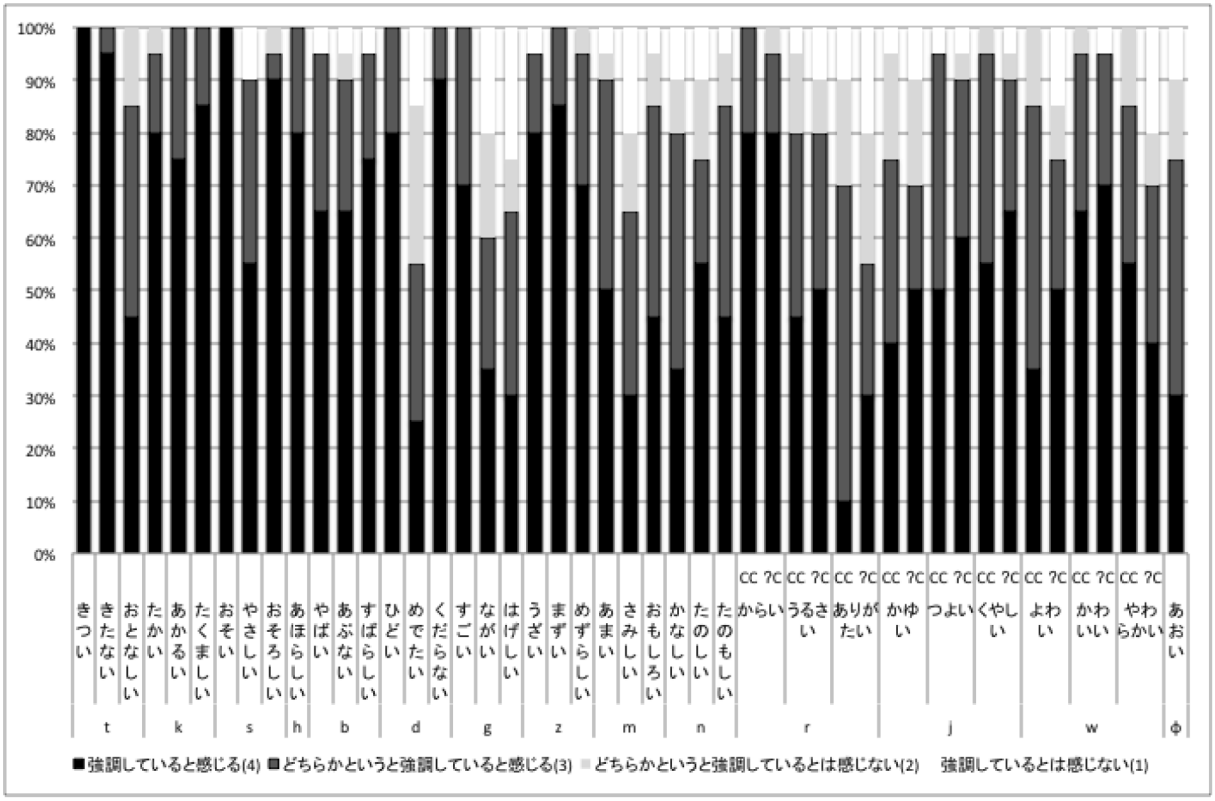

図 1　音声の場合の調査結果

向にある。けれども、「強調と感じる」と 100%評されている語が 5 語（「ひどい」「くだらない」「すごい」「まずい」「からい（CC）」）あるなど、有声子音前であっても強調表現としての促音挿入は認められやすいようである。さらには第 2 音節に頭子音をもたない「あおい」であっても、[aʔoi]という母音の直前に促音を挿入した発音を 75%が「強調」と評している。同じ子音前への促音挿入でも容認度にバラつきがあることから、有声子音の中でも特定の子音前への促音挿入が容認されにくい／されやすいとは、少なくともこの結果からは言い難く、容認度は他の要因によって決まると考えられる。r 音・j 音・w 音前への促音挿入については、声門閉鎖音が加えられるパターン（ʔC）と、各子音が長子音化するパターン（CC）の容認度をそれぞれ調査したが、結果に大きな違いは認められず、最大でも「ありがたい」と「やわらかい」における 15 ポイント差であった。

3 文字を用いた調査

音声と文字では容認度が異なる可能性があると考え、文字を用いた調査も実施した。

3.1 調査用の刺激

音声を用いた調査と同じ 38 語に、それぞれ第 2 モーラ頭子音前に「っ」の字を加え（例：

すっごい)、全てひらがなで表記したものを刺激とした。

3.2 調査方法

音声を用いた調査の協力者 20 名に、前調査の干渉を避けるため最低 2 週間のあいだを空けて新たに調査協力を依頼し、18 名（女性 16 名、男性 2 名）から回答を得た。質問紙は同じく Google フォームを用いて作成し、文字で表された刺激を見て、強調と感じるかどうかを、音声を用いた調査と同様に 4 段階（強調していると感じる・どちらかというと強調していると感じる・どちらかというと強調しているとは感じない・強調しているとは感じない）で評定してもらった。

3.3 結果および考察

結果は次のようになった（図 2)。全調査語で「強調と感じる」の判断数が「強調と感じない」の判断数を上回り、「きつい」「きたない」「あかるい」「おそろしい」「あぶない」では回答者全員が「強調」と評価していた。容認度が 70%未満（55%～67%）と比較的低い語は、C2 が無声子音でない場合に集中している。無標である無声子音前への促音挿入は、全体的に強調表現として認められやすいようである。しかし、音声の場合と比べると、C2

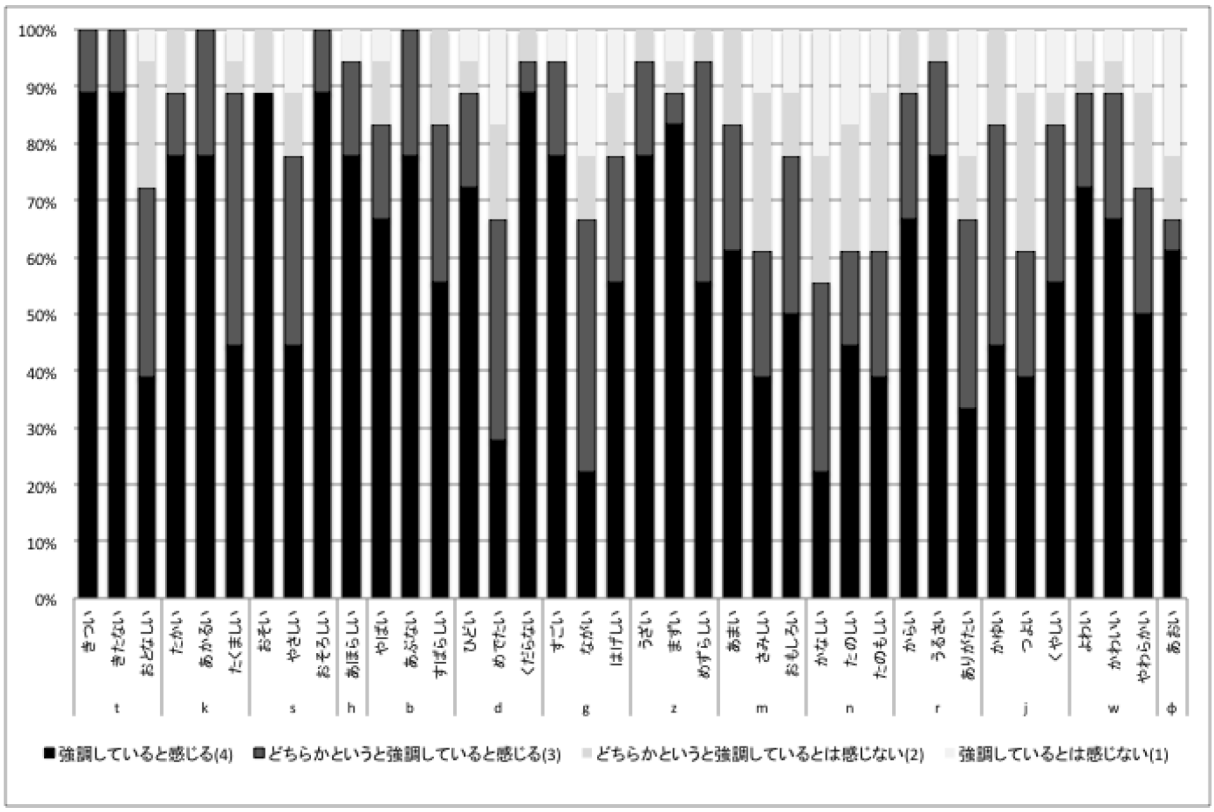

図 2　文字の場合の調査結果

が有声か無声かで結果に明確な違いは現れていない。この要因は今回の調査結果のみでは判別できないため、今後改めて調査する必要がある。

4 音声の場合と文字の場合の結果の比較

音声の場合と文字の場合の結果を比較する。音声の場合の r 音・j 音・w 音前への促音挿入については、前述のとおり声門閉鎖音を挿入するパターンと子音を長子音化するパターンの間に大きな差が見られなかったことから、ここでは文字の場合の結果と並べたときのグラフの見やすさを優先し、声門閉鎖音が加えられるパターンの結果のみを示す（図 3）。

注目すべき点としては、C2 が n 音の語が挙げられる。「かなしい」「たのしい」「たのもしい」では、音声の場合と文字の場合で結果にやや大きな差があり、音声の場合の容認度の方が文字の場合よりも高く、最大で 25 ポイント異なっている。同じ鼻音でも、C2 が m 音の語では最大でも 7 ポイントしか差がない。この要因についても、今後検討する必要がある。C2 が n 音の語以外では、音声の場合と文字の場合で結果に大きな違いは見られず、全調査語に通じてどちらかの容認度が決まって高くあるいは低くなることもなかった。

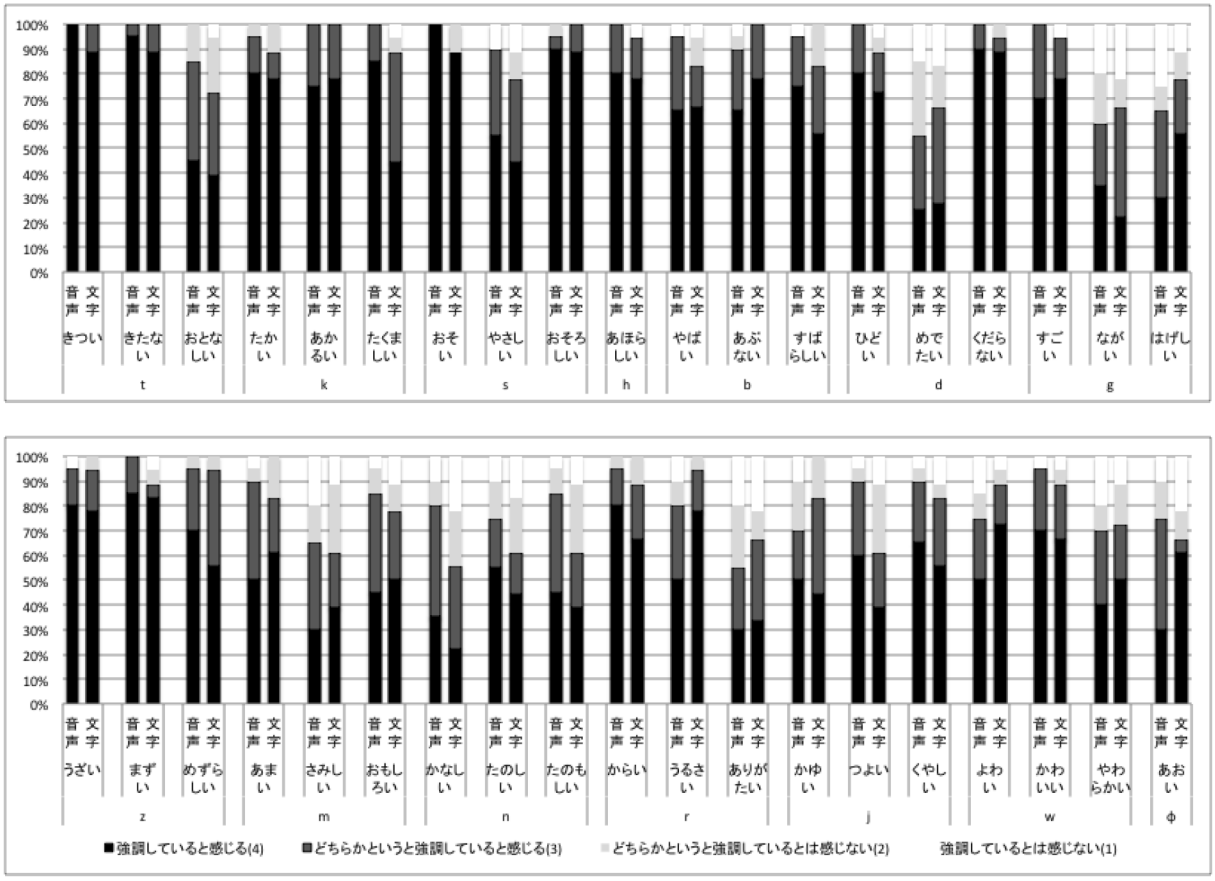

図 3　音声の場合と文字の場合の調査結果

5 おわりに

本研究では、日本語形容詞において、促音挿入による強調がどのような語でどの程度容認されうるのか、東京方言話者を対象に、音声の場合と文字の場合で質問紙調査を行なった。調査の結果、音声の場合でも文字の場合でも、一般的には忌避される有声子音前への促音の挿入も含めて、促音の挿入は強調表現として認められやすいことが確認された。一方で、子音種の違いだけでは説明のつかない結果も得られたことから、今後さらに調査を進める必要があることも明らかとなった。

引用文献

Itô, Junko, and Armin Mester (1995) Japanese phonology. In *The handbook of phonological theory*, ed. John Goldsmith, 817–838. Oxford: Blackwell.

金子理紗（2015）「強調のための有声子音延伸について」『音声言語の研究9』（大阪大学大学院言語文化研究科），57-61.

Kubozono, Haruo, Junko Itô, and Armin Mester (2009) Consonant gemination in Japanese loanword phonology. In *Current issues in unity and diversity of languages. Collection of papers selected from the 18th International Congress of Linguists*, ed. The Linguistic Society of Korea, 953–973. Republic of Korea: Dongam Publishing Co.